

2007 年池田杯総括コメント

2007 年 11 月 4 日
ナカオシュンスケ

1. はじめに

私が皆さんに書いた個別コメントはもうお手元に届いていると思います。「なんて厳しいコメントでひどい奴だ」と憤慨している人も多いと思います。ですが、皆さんを恨んで書いたものではありません。誰にでもできる適當なお世辞を述べて終わらせるのに比べて、厳しいコメントを書くことの方がパワーがいるのだということをどうかご理解していただければと思います。

私は、「これは申し訳ないけれどもどうやったらもっと良くなるか思いつかない」という Speech には数行のコメントしか書くことができません。逆に「見所はあるけれども、こういう点に関して深く考察することができていない」と思われる Speech にはコメントをたくさん書きます。ですから、コメントが A4 一枚近くに渡り、「ここまで言わなくてもいいじゃないか」と思った皆さんはどうか恨まないでください。そういう Speech にこそ発展余地がたくさんあると本気で思っているのです。

2. 総括コメント

オリジナリティがなければ聞いてもらえない

今回、池田杯のコメントを書いていて、「頻繁に見聞きする内容なのでオリジナリティがありません」というコメントを多くの Speech に付させていただきました。このようなコメントを書くと、「自分の意見が否定された。正しいことを言っているのにどうして評価してもらえないのだろう」という反発を覚える応募者が少なくないと聞きます。ですが、再度心にしっかりと刻んでもらいたいことがあります。それは、Speech 大会では、いくらその人が述べている意見が正しくても、オリジナリティがなければその Speech は評価に値しないということです。

私が皆さんにお願いしたいのは、少なくとも 6 ヶ月前から次のシーズンで発表する Topic の候補を準備してもらいたいということです。例えば、今日は 11 月ですから、今は目

の前に差し迫っている後期の Speech 大会の練習に励むと同時に、来年 5 月の前期大会に向けて Topic 探しをしておいてほしいのです。

その上で、普段の Speech 活動でメンバーが集まる際には、次の期の Topic について話し合いを重ね、今 Speaker が考えている Topic に対する意見にオリジナリティがあるかないか、別の切り口で考えれば面白い意見になる余地はあるか、を議論するということを習慣づけることが必要になります。そうしなければ、オリジナリティがあつて面白い Topic にたどり着くことは決してできないでしょう。

また、仲間の間で意見を交換する際は、「面白くないものは面白くない」とアドバイスしてあげることが肝心です。原稿提出直前にはなかなかそういうことは言えないでしょうが、6 ヶ月近く残している時期なら相手も焦ることはないでしょう。「嫌われたくない、なあなあに済ませたい」という気持ちはよくわかります。ですが、そうした逃げの態度の積み重ねが、落選というその本人にとってもっとも残酷な結果に行き着いてしまうのです。そして、そうした本人にとっても相手にとっても意味のない時間を過ごしていると、「結局 ESS ではほとんど何の能力も身につけることができなかった。時間の無駄だった」という悲劇に卒業してから気づくことになります。

さらに、その意見が面白いか面白くないかは、ESS だけでなく家族の人に聞いてみるのもポイントです。はっきり言って、ESS の中には型にはまった思考法しかできず、世間一般的の常識からかけ離れたユートピアと化してしまっている側面が多々あります。そうした閉じた世界から抜け出し、普通の社会生活を送っている人が聞いて興味を持つものかどうか試してみることが重要です。それで、「他人事みたいな話で面白くないな」とか、「真実味がまったくない」などと家族から批評されるようでは、同じ社会人のジャッジからも厳しいコメントが返ってくることはまず間違いないでしょう。

他の ESS と同じような活動、他の人と同じような行動をしていては Originality の高い Topic に出会うことなどできません。面倒だと思うかもしれません、他を出し抜いて自分が成功するために努力することが必要だと思います。

成功者の話しか聞きたくない

ある分野において、さまざまに取り組んで成功している人の話には信憑性がありますが、「あの時こうすべきだった」と過去を悔やんでいるだけの人の話を信じることはできません。普段社会生活を送っていれば、当たり前のことです。ですが、不思議なことに、

このような世の常識から逸脱した Speech が審査員のもとに多く送られてくるのです。

例えば、「僕は選択を間違えた。みなさんこのようにして選択すべきだ」(個人攻撃にならないようにあえて抽象化しています。こういう Speech は複数ありました。)という主張を、あなたは信じることができますか？実際その人は、自身が提唱する方法を実践したことなく、単なる想像の域で物事を語っているのです。そのような人が聴衆を納得させることができるような Speech をできるはずがありません。

私が聞きたいのは、「僕は選択を間違えた。そこで間違えた原因がここにあると思った。そして次はこうしようとプランを決めて、それを実行したから今はこんなに成功している」という話です。そういう、自分の意見をすでに行動に移して成功している人の話なら信じられるし、何よりそういう人は、図書館で他人の意見をぱくってきただけの人が決して語ることができない具体的な話を存分に Speech に込めることができるからです。これがすなわち Originality となるのです。

自分が実行して成果を出してから Speech にする

また、自分が今すぐ実行できるようなプランを提唱しているにもかかわらず、それを行った形跡がまったく見られない無責任 Speech も本当に多くあります。例えば、ここ数年で何本も見聞きした「助け合いの精神の崩壊」(これも個人攻撃にならないよう敢えて抽象化しています)というテーマが典型的な例です。そこでは大体、困っている人に声をかけよう、周りの人にも声をかけて参加を促そう、困っている人と会話ができるようなイベントに参加しよう、ということだけが毎年変わり映えもなく言われます。

しかし、その人の Speech では自分がそうしたことを実践して、生活が豊かになっているという具体的な話は一切述べられていないのです。つまりこれは、自分ですぐに実行できるのにもかかわらず、自分では一切何も行動を起こしていないということを示しています。そして、自分が行動を起こしていないくせに、聴衆にはこうしましょうということを平気で述べているのです。そういう Speech に誠実さはあるでしょうか。

Original な Speech を作るヒントは、自分で行動してみることで生まれます。自分が提起していることを自分でも実践してみて、その結果がどうなるのか肌身を通して検証してみなくてはなりません。

困っている人に声をかける勇気の第一歩はどうしたら踏み出せるのか、

困っている人を助けるために、どんなイベントを企画したら周りの人が来てくれるのか、困っている人も、来てくれた人も楽しんでもらうためにはどんな工夫が必要なのか、それを成功させることによって、自分にはどのような良いことがあったのか、それを持続させるにはどうしたら良いのか、

などなど

実際に自分で行動を起こしていくうちに、頭の中で考えていても思い浮かばない難題が次々と巻き起こります。それを一個一個解決していくことで初めて、他の人に決して思いつかない何かが自分の中に生まれてくるのです。

現場に出かけなくては「なぜ」を5回も繰り返せない

皆さんの中には、自分のESSの先輩やKUELやKESSAの先輩から、「なぜを5回繰り返せ。そこまでしなくては根本原因にまでたどり着くことができない」ということを聞いたことがあるでしょう。ここで問題なのは、少なくとも私が審査している限り、「なぜを5回繰り返せ」ということを偉そうに下級生に言っている上級生も、それをお題目のように聞き流している下級生も、実際には5回繰り返したことなんて一度もないのではないかということです。

私がそう思うのは、図書館やインターネットで見聞きしているだけでは、「なぜ」をせいぜい3回繰り返しただけで終わりだと思うからです。そこから先の4回目・5回目の質問に対する答えは、もう文献の中の2次情報にはなっていなくて、実際にその問題に直面している人や、解決に向けて悪戦苦闘している人の声の中にしかないからです。しかし、そうしたところにまで奥深くリサーチ活動をしていると思われるSpeechにはほとんど出会ったことがありません。

逆に考えれば、99%の人が図書館やネットの中に閉じこもったSpeechしかできていないのですから、現場に出て、様々な人と意見交換をし、その過程でさらに面白い考え方や情報をキャッチしてSpeechを作れば、必ずOriginalityのあるSpeechを作ることができるのです。友達と仲良く生ぬるいキャンプや勉強会に参加して、形式的なフローバッシングやブレインストーミングをやっている暇があるのであれば、今すぐ現場に足を運んで、そこにいる人たちと意見交換をすることのほうがよほど大事なのではないでしょうか。

3 . 池田杯の理念

今回、池田杯の審査をさせていただくにあたり、大会実行委員からは次のような観点で審査をしてほしいということを言われました。

- ・ 池田杯は sincerity(誠実さ) を重視しており、これは、ジャッジングシートの contents の speaker's involvement 、つまりスピーカーがどれだけその問題を真剣に考え、関わっていったのかという視点が含まれている。
- ・ ネット上の情報・本などのメディアだけに頼るだけでなく、スピーカーが自分の足で直接現場を訪れてリサーチするなど、取り上げた問題を解決していくための努力を評価したい。

私はこの文面を見たとき、池田杯の実行委員は本当に Speech のことをよく考えているなと心から感心しました。通常、他の大多数の大会からの依頼には、「国際人として通用するような Speech を」とか「コンテンツを重視した審査をしてほしい」というような、誰にでも言えるような一般的な文面しか見ることができません。今回、池田杯実行委員会がこのような理念にたどり着いた背景には、「本当に聞く価値のある Original な Speech を厳選するにはどうしたらよいのだろう」という問題意識を深く追求した努力があったのだと思います。

今回の応募では、残念ながら Originality が欠落していると思われる Speech が多く見受けられました。しかし、これは現役生だけのせいではありません。ESS のジャッジの多くは、「Original な Speech を作れ」と現役生に要求します。しかし情けないことに、「それにはどうしたら良いのか」という現役生の切実な疑問に正面から答えられるジャッジは少数しかいません。多くのジャッジは、どうするべきかという具体的な提案がほとんどできず、具体的な方法論を教科書にすることもできないし、他の人では到底語れないようなレクチャーをすることもできないのです。

これはひとえに、ジャッジ自身も自ら行動を起こしてその中で深く考えた Speech を作ったことのある人が少ないからだと思います。しかし、それでは、出場者とジャッジが互いに良い影響を与えながら、共に育っていくという好循環が生まれません。

私は、「Original な考え方を得るには人とは違う Original な行動をとらなくてはならない」と考えています。人と同じような行動をとっている限り、Original な意見を生み出すことができるのでしょうか。私は決して生み出せないと思います。そうした当たり前のことには気づかず、自分がテーマとしている人達に会うことすらしないで Original な Speech を

作ることなどできないということに、今すぐ気づくべきです。

Original な意見にたどり着くことができるかできないかは、頭の良し悪しだけでは決まりません。他の人が現場に出て行かないのであれば、自分は現場に出て行って、自分にしかできない「生きた Speech」を作る。そして初めて、Speech 活動を通じて一生ものの能力を得られるのであり、また、自分が優勝カップを手にした後に、他の一般的なジャッジでは決して教えることのできない教育を下級生に提供することができるのです。皆さん現役生が池田杯で活躍するのはもちろん、将来の教育の担い手として羽ばたくことにも強く期待しています。

4 . 最後に

現場に出て行って Speech を作るには大変な忍耐力が要ります。徒労に終わることも数多くあるでしょう。しかし、徒労を繰り返すことでしか、素晴らしい作品を生み出すことはできません。徒労をしたことのない人には、徒労を繰り返して成功した人の快感を味わうことができないのです。「やり直しをしよう」と思った時に素早く行動できる人がプロです。そういう人こそが優勝カップを手にすることができるのです。そして、そういう人だけが次代を担う若者を育てる力を蓄えていくのだと思います。

この池田杯が、あなたと、あなたが出会う未来の後輩たちの成功への第一歩となるように願っています。本番まで残り 2 週間を切りましたが、まだまだやれることはあります。チャンスは面白い仕事の中にはありません。一見つまらないと思われる地道な活動の中から見つけることができます。ですから、自分らしい Speech をするには何をすべきか、優先順位をつけながら、一歩一歩着実に Speech を改良してください。そうすれば必ずあなたは壇上で輝くことができます。応援しています。ぜひ全力で光り輝いてください。

長々とありがとうございました。

Speakers are not braver than anyone else.

They are just braver seven minutes longer on the stage.

ナカオ・シュンスケ